

山口県医師会警察医会 第28回研修会

と き 令和3年7月31日(土) 15:30～17:00

ところ 山口県総合保健会館2階 多目的ホール

[報告:長門市医師会/山口県医師会警察医会長 天野 秀雄]

令和3年7月31日(土)、山口県総合保健会館2階「多目的ホール」において、山口県医師会警察医会第28回研修会が開催された。座長は天野、演者は山口大学医学部法医学教室教授の高瀬 泉先生で、ご経歴の紹介に引き続き、講演が行われた。

講演

「死因究明に係る関係機関の連携についてのご提案」

山口大学大学院医学系研究科法医学講座教授

高瀬 泉

1. 山口大学法医学教室の実務

(1) 法医学解剖

山口大学法医学教室の過去3年の解剖数は、平成30年が119件、令和元年が136件、令和2年が141件で、令和3年は研修会の時点で、すでに90件と早いペースである。

(2) 解剖後の仕事

- ・ホルマリン固定組織の切り出し
 - ・組織標本の検鏡
 - ・解剖時撮影写真の選別
 - ・鑑定書の作成
 - ・保険会社・労働基準監督署等回答・意見書作成
 - ・警察・検察の調書作成協力
 - ・裁判出廷、図画等裁判員向け資料作成
- 等々、多岐にわたる。

(3) 法医学解剖例に関する調査研究

- ・異状死の死後画像検査(CT検査)の実施状況について
 - ・青壮年期の突然死の実態について
 - ・飲酒と外因死との関連について
- などを行っている。

2. 解剖の具体例

・覚せい剤使用女性のくも膜下出血による死亡事例

30代後半の女性で、某日、体調不良で急に苦しみだしたところを家族が発見し救急搬送されるも死亡が確認。覚せい剤使用の前科前歴があったとのことで、検視時にInstant-View[®]を用いて簡易薬物定性試験を行ったところ陽性反応を示し、科学捜査研究所での正式鑑定でも成分を検出したとのことであった。緊急搬送先でのCT検査では、内因性くも膜下出血を指摘されていた。解剖時に採取された尿でのTriage[®]を用いた簡易薬物定性検査は陰性になっていたが、科捜研で正式に鑑定してもらった結果、フェニルメチルアミノプロパンを検出したとのことであった。

これまでの報告によると、右椎骨動脈は中膜壊死などの血管病変を伴いやすい部位の一つとされており、くも膜下出血は常に内因・外因の鑑別が問題となるが、本事例では覚せい剤摂取による外因によると判断された。

・左冠状動脈主幹部血栓により急死した閉経前女性の剖検例

40歳代前半の女性。某日早朝、トイレに入ったまま出てこないことから起床した夫が見に行ったところ、床上に座って洋式便器に覆いかぶさる状態で呼吸をしていなかったとのことで直ちに救急搬送されるも蘇生せず、死亡確認となった。既往歴は子供のころに小児ぜんそくがあった。前年から当年にかけて過去2回、「呼吸ができず苦しい」との訴えあるも、いずれも少し休めば回復したため、病院は受診されていないとのことである。同日の20時30分ごろ、夫に「胸の痛み、呼吸ができない」と訴えるも約1時間で回復し、23時ごろにトイレで嘔吐した際にすっきりしたので

家族と就寝するも、朝方に姿が見えず、6時ごろに夫が発見、その後、救急隊を要請したがCPAの状態、病院到着後に心臓マッサージ・強心剤などを行うも蘇生せず、死亡確認となったケースである。この方の場合は承諾解剖となっている。結果、特発性冠動脈解離ということで、健康な若年者の突然死の原因の一つとされているが、発症後の生存率はわずか30%と言われている。78%は女性でその1/4が産褥期に見られるという報告がある。69%の患者が当初不明死とされ、今回のように解剖で初めて診断されるという。このケースでも症状が何度か繰り返されているような状況であったので、もっと早くに診断され、病院と連携がとれるような状況にあれば、この死は防げた可能性があったケースと考えられる。

その他、

・車両11台関与の高速道路事故で車外放出後複数台に轢過された剖検例を解説された。

3. 性犯罪の鑑定例

・性的虐待の可能性が高いと考えられた膣内異物事例

両親との3人暮らしの3歳の女兒で、保護者らが、膣内にティッシュペーパーがあることに気が付き、一部取り除いたが未だ残存しているとのことで、異物除去目的で産婦人科を受診された。診察の際、保護者らは「女兒が自分で入れた」などと説明していたが、担当した産婦人科医は性虐待の案件の診察経験があり、膣開口部や処女膜の所見から性的虐待を疑ったため、臨床法医学的鑑定が必要とのことで、児童相談所から当科への依頼となった。なお、就寝時は本児と父が2階で、母は1階で過ごされていたとのことであった。まず、産婦人科医が鑑定書を作成したが、診察の際に抵抗なく、膣を触っても嫌がらず、膣の入口は1.5cmに開大しており、処女膜は著しく伸展していたとのことであった。ただし、新鮮な裂傷や擦過傷、出血斑などはなかったとのことであった。また、SSSの膣鏡を挿入したが痛がらなかったとのことである。内診をするかどうかは賛否両論あるところだが、指の挿入は容易で痛みや不快

感も見られなかったが、大人の指以上の径のもの挿入はできない状態であった。

通常、膣の入口の開大については5～10歳では年齢の数字が目安となっていることから3歳であれば3mm程度であるはずが、本児の場合は明らかに異常な開大である。以前より繰り返し他者に膣を触られ、大人の指が入る程度に膣の入口を開大せしめられ、同時に処女膜も伸展するような状況になったのではないかと判断された。実はこのお子さんは、産婦人科医師の前で、ティッシュを自分で丸めて膣に入れようとするような動作をしていたとのことで、まず大人の接触があって、膣の存在を知って、自分で異物を入れるようになったのではないかと産婦人科医は判断し、性虐待の被害児であると強く推察すると鑑定された。

鑑定書には、処女膜の開口部は大人の指の大きさ程度に開大と記載した。また、膣壁等は容易に観察可能であった。処女膜の後部は確認できなかったため、ある程度長い期間にわたり、ある程度の硬さをもつ物体が複数回挿入されて生じたかと判断した。身近な大人等の指あるいは同程度の径をもつ物体が繰り返し挿入されて生じたと考えられ、性的虐待の可能性が高いと判断した。

結果は、家庭裁判所では虐待が認められていて、親から離さなければならぬとされ、高裁でも、結局こちらの主張の、性虐待が認められた。ただ、その当時は、加害者が家を離れるのではなく、被害者であるお子さんが家を離れなければいけないという状態であったので、そのあたりが問題であると考えられた。その後、刑法が改正されて、保護者による性虐待が罰せられる傾向になったので、非常によかったと考えている。生きてる間に刑法が変わる瞬間に立ち会えることはなかなかないと思うので、とても貴重な機会に立ち会えたと思っている。

これまでも膣内異物についての鑑定依頼があり、身近にある文房具や、おもちゃのプラスチック製のボーリングのピン、他にはゴム風船などもあったが、なぜか3歳ぐらいで発覚している。たとえば臭いがするというので保育園の先生が発見したり、お母さんがおりものなどで気づくということはあったが、まさかそのような状態に

なっているとは思わないので、最初は小児科や内科に行って抗生物質をもらわれるが、なかなか改善せず、万が一のことを考えて産婦人科を受診したら、膈内に何かあったというようなケースが結構あった。海外では膈内異物は虐待を強く疑う所見という報告があるが、日本ではなかなか共有されていないので、広めていきたいと思っている。

その他、

・性感染症がみられた女児の性的虐待の疑いに関する裁判例

・集団強姦事件の写真鑑定による裁判例について、ご提示いただいた。

(臨床) 法医学鑑定からみた課題

虐待のお子さんの場合、時々、この子自らすすんでそういった行為を行ったのではないかというような指摘をされることがあるが、成書には、お子さんの心理状態について確立した概念があり、性的虐待順応症候群 (Sexual Accommodation Syndrome) というものがある。加害者、特に監護してくれるような立場にある、本来は守ってくれるべき存在から、① Secrecy：秘密性、黙っていることを要求され、② Helplessness：そこに捕らわれているような状態になり、相手のこの状況から抜け出せないのではないかとだんだん思うようになる、③ Entrapment and Accommodation：その状況の中でやっていくしかないというような心理状態に達して、④ Delayed, Conflicted, and Unconvincing Disclosure：最終的に自分から話をする状況が遅くなったり、さまざまな葛藤があって、きちんと人に伝える、納得してもらえるような開示の仕方ができない、⑤ Retraction：よくあるのが、一旦開示したにもかかわらず、言ったことを取り下げるような状況が生じることはありえるということを法曹関係者にもきちんと伝えていかなければならないと思っており、それを意見書に書くようなこともある。

性感染症については、淋菌、クラミジア、梅毒、HIVがあるが出生時の垂直感染 (母子感染) 以外は性的接触によるものと考えてよいというように海外ではされている。

4. 調査・研究

(1) 児童虐待

SBS (shaken baby syndrome：揺さぶられ症候群) / AHT (abusive head trauma：虐待による乳幼児頭部外傷) に係る裁判の実際について提示された。

近年、乳幼児の頭皮に明らかな損傷を認めないにもかかわらず脳に障害を来している状態に対し、AHTという用語が使われることがある。これは、従来のSBSでは、頭部に対する揺さぶり以外の暴力を排除してしまうためである。

わが国における発症頻度はまだ不詳であるが、アメリカで10万人の乳児あたり30人という報告がある。

(2) 被虐待児の胸腺退縮機序の研究

(3) 飲酒に関する研究

について、解説いただいた。

性暴力や児童虐待で、二次被害を与えることなく適切に対応するためには、さまざまな立場の関係者の対等な連携が不可欠である。業務の効率化や人材の確保、社会連携の設置、症例検討などを今後も行っていく必要がある。

当講座について

本年度は解剖の数も増えていることから業務の効率化を図ること、書記についても今までは警察の皆様にお世話になっていたが、今はレコーダーを付けるような形にしており、音声で入力してそれを文字起こす人を雇い、できるだけ効率化を図るように、また、人材を確保するようにしている。当講座としては社会連携講座のようなものを作って社会と関係機関の皆様と連携できるような仕組みづくりをしたいと思っている。

県下唯一の医書出版協会特約店

医学書専門 井上書店
看護学書

〒755-8566 宇部市南小串2丁目3-1(山口大学医学部横)
TEL 0836(34)3424 FAX 0836(34)3090
[ホームページアドレス] <http://www.mm-inoue.co.jp/mb>.
新刊の試覧・山銀の自動振替をご利用下さい。